

シフォンケーキ



和里かりん

残業続きで体調を崩し、風邪をひいた。

そんな金曜日の夜。

翌日のデートの約束をキャンセルするメールを送ると、わざわざ休日に風邪をひくなんて、社会人の鏡よね...と、彼女から嫌みとも冗談ともつかない返信があった。

...これは、怒ってるんだらうなあ...

熱でぼやけた頭で考える。

このところ忙しくて、毎週のように休日出勤を強いられて、デートどころではなかった。それを申し訳なく思って、今週末こそはと、根を詰めた結果がこれだ。何とも情けない限りである。

悪い悪いと思いながら、結果的に彼女をほったらかしにしている。そろそろ見切りを付けられても文句は言えない状況だ。

これは、何か返信した方がいいんだらうな。などと考えながら、食事を口にする元気もなくて、空っ腹に風邪薬を飲んだのがいけなかった。

玄関のチャイムの音で目を覚ましたのは、翌日の昼過ぎだった。

...宅配便かな...

そう思ったものの、体が重くてベッドから起きられない。

ベッドの中でのたうちまわっていると、今度はドアにノックがあって、間を置かず、鍵をかけ忘れたドアが勢いよく開いた。

「寝てんの〜？」

という声と共に、腕にコンビニ袋を提げ、四角い大きな箱を抱えた彼女が姿を見せた。

「あら、結構重症ね」

心なしか、その表情は笑っているようにも見える。少なくとも怒ってはいない様だったので安心した。

安心すると同時に、これが彼女の初めての自宅訪問だと気付いて、どぎまぎする。しかも、病気とはいえ、自分は寝起きのパジャマ姿で...

「...えっと...何？」

「どうせ、ろくなもの食べてないんだらうと思って」

ベッドサイドのテーブルに四角い箱をどんと乗せると、彼女は近所のコンビニで仕入れてきたものを並べ始めた。アイスクリームとスポーツ飲料と牛乳に、何故だかジャムの小瓶が数種類。

「はい、お見舞い」

「あ、どうも...」

「ここの家、お湯ぐらいは、沸かせるの？」

そう言いながら、彼女が殺風景なキッチンに視線を向けた。

「...ええと、マグに水入れて、レンジでチンなら」

「.....」

「基本、外食だし...コンビニすぐそこだし...」

「だろうと思った」

彼女が肩をすくめて四角い箱を開けた。

中から現れたのは、真ん中に丸い穴の開いた背の高いスポンジケーキ...？

「...変わった形のスポンジケーキだね」

「シフォンケーキよ。あたし、お茶する時に、あなたの目の前でよく食べてるじゃない」

「え...ああ、あれ？」

「元の形がこれで、お店のは、カットされて出てくるのよ」

「ああ...成程」

「食欲ない時でも、柔らかいから、食べやすいかと思って」

彼女がコンビニ袋の中から、プラスチックのフォークを取り出して差し出した。

「どうぞ召し上がれ」

そう言って彼女は牛乳を手に立ち上がった。

「...これ、作ったの？」

「そうよ。まさかお湯ぐらいは沸かせるかと思ったけど、レンジでチンとはねえ...」

ぶつぶつ言いながら、彼女はすかさずかの食器棚の中から、大ききの違うマグカップを二つ取り出すと、それに牛乳を注いでレンジで温め始めた。

程無く、出来上がったホットミルクを手に戻ってくると、彼女はまた袋に手を突っ込んで中を探っている。

「ミルクティーとカフェオレ、どっちがいい？」

「え？あ...と、カフェオレかな」

答えると袋の中から、インスタントコーヒーの小瓶が姿を現した。それを調味料でも入れる様に、ホットミルクに数回振りかける。更に、袋の中から紅茶のティーパックを取り出すと、それをもう一方のマグに入れた。

「あたしは、ミルクティーでと。砂糖いる？」

「いや...いい...」

手はシフォンケーキを突きながら、その手元を思わず凝視していた。

「何？」

「何か、凄いなと思って」

普段は殺風景なはずの部屋が、ちょっとしたカフェに早変わりして、こうして彼女と差し向かいでお茶をしているなんて、魔法の様だ...なんて言ったら笑われるだろうけど。

「こいつ、見掛けによらず、料理じょうずなんじゃん、とか思った？」

素直に頷くと、彼女が愉快そうに笑った。

「君のそういう敷居の低いところが、す、き、」

「す・・・」

冗談半分に言われた言葉に、思い切り動揺した。

敷居が低いの意味は良く分からなかったが、聞き返すのも何だか照れ臭くて、フォークでケーキを切り出す事に専念する。

...そうだなあ。そろそろ、ちゃんと、先の事とか考えないと...

そう思いながら口に入れたケーキは、ふんわりと心地のいいやわらかな食感で、控え目な甘さが、何とも癖になる味だった。

「おいしい...」

そう呟いて、俺が二度三度とケーキを口に運ぶのを、彼女は楽しそうな顔をして見ている。

「残ったらラップして冷蔵庫に入れとけば、四、五日は持つからね。非常食にはいいでしょ？」

言いながら、彼女は四次元ポケットから、今度はラップを取り出した。

「味が飽きてきたら、アイスクリームとか、ジャムとかトッピングするとまた感じが変わっておいしいから...」

彼女の言葉に相槌を打ちながらケーキを食べていると、ふわふわの中に、突然ありえない固さのものが現れた。

「あたっ」

ふわふわの食感に慣れていた歯は、それを思い切り噛みしめてしまった。

「...何か...変なの入ってる...」

俺が顔をしかめると、彼女が身を乗り出した。

「出してっ。何入ってた？」

口をもごもごさせて、それを舌で探り当て、指で引きずり出した。

それは、丸いリング状の金属だった。

「...指輪？何でこんなものが...」

「んふふ～。クリスマスプディングになぞらえて作ってみました」後、中にボタンとコインが入ってるから、気をつけて食べてね」

「はあ？」

「知らない？イギリスのおまじない。指輪を引き当てた人は、結婚運がいいって話。良かったねえ。おめでとうっ」

彼女が満面の笑みで言った。

...こういうのは、やっぱり、タイミングと勢いなのだと思う。

プリンなら、子供の時に作った事がある。

確か、粉末の素を買って来て、牛乳を加えて温めて、後は冷蔵庫で冷やすだけ。

楽勝だ。

そう思ったら、思わず口走っていた。

「じゃあ、今度は俺が、クリスマスに指輪入りプリンを食わしてやる」...と。

よもやこれが、後々まで、笑い話にされるプロポーズになろうとは思ってもよらずに、その時の俺は、清々しいまでの達成感に包まれていた。

【 シフォンケーキ 完 】